

古い記憶は色あせるものだが、なぜか、タバコの記憶は鮮明に甦るから不思議である。

親友で仕事仲間のA君はパイプ作りに凝っていた。彼はパイプが完成する度にやって来て、その作品にタバコの葉を詰め込み、得意げに仄かな甘い香りのする煙をくゆらせた。

ある日、A君と共通の用事があって、新宿のK書店に出掛けた。書店の二階に通じる階段側通路の奥まった所に小さな店があった。A君の足は迷わずその店に突き進む。どうも彼の意図は、はなからそこにあったようだ。

その店には小児の握りこぶし程の木片に、無造作に黒い管を突っ込んだ品物（パイプの原型）が、山積みになって放置されていた。

人生に「たら」と「れば」は付き物だというが、あのとき黒い管を突っ込んだ木片さえ買って帰らなければ、禁煙地獄の憂き目を見ることはなかっただろう。当時、私もA君もナイトクラブ専門のサックス奏者で、昼間は時間を持て余していた。それが災いして、パイプ作りが格好の遊びと化したのである。

完成したパイプは知人に上げていたが、完成度が高まるにつれて、作品に情が移るようになった。その丸みや曲線が、愛用の楽器に似ているようで、妙な気分になったのだ。

真偽は定かではないが、グランドピアノやギター、サックスの曲線は女体を模しているという風聞がある。確かにサックスのあの曲線は、頼ずりしたくなるほど魅惑的だった。

直に唇が触れる管楽器は、弦楽器や打楽器に比べ特別な感がある。管楽器は吹きまくっていくうちに、楽器自体の音が抜ける。更に説き伏せるように吹き慣らしていくと、楽器は奏者の意のままに、すすり泣くのである。

さて、新作のパイプが完成し、いつも通りに、その誘発的な曲線に、手と鼻と顔の脂を擦り込んでいたが、不覚にも、このパイプを成熟させたいという衝動が走りだし、ついに喫煙に及んだのである。二十六歳であった。

しかし私には「いつでもやめられる」という強い自信があった。安易で無防備なその心構えが、タバコの魔力を増長させたようだ。

A君が廃業して帰郷したのを機に、パイプ遊びは終わったが私の指先からタ

バコが消えることはなかった。喫煙歴十年、三十六歳。そのころから演奏中に息苦しさを覚えるようになり「禁煙」の二文字が脳裏をよぎった。

四十代に突入した。いよいよ不安になって本気で禁煙に取り組む。が、失敗の連続だった。これが最後の一本！と気合を入れてタバコを抜き取り、残りは箱ごと握り潰してゴミ籠に捨てる。そもそも最後の一本というのが甘かった。その一本には際限がないのだ。

あのパイプ遊びの興が、こんな取り返しのつかない事態に発展しようとは、夢想さえしなかった。といって禁煙を諦めるわけにはゆかず、試行錯誤を重ね、一進一退の日々を過ごしていた。と、転機は意外な形で訪れた。

忘れもしない平成二年六月一日、都内某所の書店で月刊誌、小説のページを広げていて、思わず驚喜の声を上げた。信じられない事だった。パイプ製作につぐ趣味として、投稿を続けていた私のショートショートが、活字となって目の中に飛び込んできたのだ。

思考が狂喜乱舞を続ける中、言葉や文章ではとても表現できないこの衝撃を何かの形にして残せないか、という思いと同時に、走り抜けた閃きは「禁煙」だった。私はその閃きを天啓のように受け止め、決断したのだ。

禁煙は決断するまでに多大なエネルギーと勇気がいるが、決断を持続させ成功に導くまでには更に数倍のエネルギーがいる。五日程度は誰でも我慢する。が、一週間目にやって来る第一関門で大抵は挫折する。「バカバカしい」というのが自分への言い訳らしい。実際、呆れ果てる程の我慢と根性があるのだ。

我慢も限界を超えると禁断症状が襲って来る。ややもすると、自暴自棄に陥りそうになる。私の場合、その正念場に突然のように、「今日までの激闘を無駄にするつもりか！」と、もう一人の自分が奮い立ったのである。

すると、今まで勝ち取ってきた激闘の日々を無にしたいくないという思いが、日増しに強くなって行った。が、その私が旨そうにタバコを吸っている。ぎょっとなって跳ね上がった。「夢」だ。今度は悪夢と戦うのか。そう思うと気が滅入りそうになった。が、逆転の発想で、夢の中の喫煙を受け入れてみた。

夢の中の喫煙は、結果的に禁断症状を和らげ、私を禁煙の花道に誘ってくれた。何よりも、「夢だから心配するな」と囁くもう一人の自分の出現が、功を奏したように思う。

タバコをやめると感覚器官が冴えてくる。朝は快適に目覚め、味覚は、ご飯の甘みやビール日本酒の微妙な味わいに反応するようになる。また、健康への

不安や吸い殻の不始末などの心配も、煙りと共に消え去る。そして「解放感」という大きな付録が付いてくる。

平成十八年六月一日は、私の十六回目の禁煙記念日だった。